

Suggested Answer

「今日は何を祝おうかな？」私は自分の授業の最初に必ず、この質問をした。時には「よいニュースのある人は？」とか「何かいい話のある人は？」のように少し違った言い方で尋ねることもあった。どのような言い方で聞くにしろ、意味するものは同じであった。それは、人生をたたえよう、正しいことやよいことに焦点を当てようという呼びかけであった。そしてそれはいつも楽しかった！

それは人生を肯定する儀式の一部で、1970～71年の間に偶然始まり、2001年に私が退職するまで続いた一なんと30年間も祝い続けたことになる！

信じてもらえないかもしれないが、このささやかな儀式は、2つの事柄の結果として始まった。2つとは、特に生徒にとっては普通否定的なニュアンスをもつ、時事問題と宿題である。高校レベルでは、私はアメリカ合衆国史やアメリカの政治の授業を教えることが多かった。これら2つの教科のどちらを教えるときも、時事問題について夜にやる宿題を出した。平均的な高校生というのは、音楽やスポーツやその他の娯楽に関係のないものに関しては悲しいほど知識がないものなので、新聞の実際のニュースの欄を読むことは彼らのほとんどにとってまったく新しい経験であった。

数週間もしないうちに彼らはそのコツをつかんだ。ほんの少し前まではその存在さえほとんど知らなかった世界の出来事について知的な会話を続ける能力が自分に新たに備わってきたことに、彼ら自身が本当に驚いていた。ちょうどそれが日課になりつつあった頃、ある生徒の何気ない言葉に私は衝撃を受けた。「あの、先生ってとても前向きな割には、ほんとに暗い宿題を出されますよね」と彼は言ったのだ。少々ぎくりとしながら、私は「それはどういう意味だい？」と答えた。ニュースのほとんどが悪い二ニュースなんですよ、と彼はあっさりと言った。

このことについて我々はクラスで長時間にわたって議論し、1つの合意に達した。よいニュースをもっと受信する必要がある、ということである。それはかなり以前から私が考えていたことである。私は悪いニュースばかりを生徒に読むように言うことで、生徒の多くに「前向き先生」と呼ばれていた自分の評判を危うくしていたのである。

それから私は、毎日何か祝うべきことはあるのだと生徒に証明し、日々1つのよいニュースを学習の場に入れるようにしようと、かつてないほどに決意を固めた。それで翌日の授業の初めに、「今日は何をお祝いする日かな？」という問

いかけをしてみた。彼らは、その日が何か歴史的に重要な日で、当然知っているべきだという意味で私が言ったものと思ったらしかったので、私はこう言った。「では違う言い方で聞こうか。誰かよいニュースのある人はいないかな「何かいい話のある人は？」そのようにして授業を始めたのはこれが初めてだったので、彼らは少し戸惑っていた。私は言った。「新聞の中によいニュースを見つけるのに君たちは随分と苦勞しているようだから、自分たちの暮らしの中によいニュースがみつけれられるかどうか考えてみよう」

何年もこういうことをやってきて、我々はおよそありとあらゆる、考えうるかぎりのよいニュースを耳にした。ささやかなものもあれば、ビッグニュースもあった。だが、何よりも重要なのは、生徒らが日常生活の中によいことを探し、それを他の者と分かちあうことを学んだということである。この単純で小さな儀式は、発展的な効果もあった。一日また一日と、我々はその前日のよいニュースに新しいよいニュースを加えて増やしていった。そして一日また一日と、生徒らはいつも、自分のまわりに生じているすべてのよいニュースについて、どんどん意識するようになっていった。彼らはよいニュースを探し、みつけ出して、他の者と分かちあうことでそれを祝ったのである。